

昨年の11月28日から、私たちは教会の暦でC年と呼ばれる季節を過ごしてまいりました。C年は主として福音書はルカによる福音書が選ばれ、1年かけて福音書を読みますと共に、主イエスの教えについて学びを続けてまいりました。

ルカによる福音書は、主イエスがガリラヤで伝道をなさった後、エルサレムへ向う決心をされ、弟子たちと共にエルサレムへの旅を続けられました。その旅の様子が福音書全体のかなりの部分を占めているのがルカによる福音書の特徴ですが、10月最後の日曜日は、エルサレムまであと30kmというエリコの町で出会ったザアカイの物語が選ばれ、先週の日曜日はついにエルサレムへ到着された主イエス一行が、サドカイ派の人々と復活について議論をした場面が選ばれておりました。彼らは主イエスの言葉に耳を傾け、真理へと向きなおすべきでありましたが、主イエスを殺す決心を固めたのでした。

そして本日は「主の日」がテーマとなっています。主の日すなわち天国が完全にこの地上に訪れ、この世の罪、そして罪の結果として定められた死もまた滅ぼされる時のことです。これまで私たちは聖書日課の中で、私たちの日常に語り掛ける主イエスの言葉を学んできましたが、教会の暦で日年最後の日曜日を来週に控え、締めくくりとして来るべき主の日について学びますと共に、新しい降臨節の主題が、間もなく迫ったクリスマスの準備をすると共に、もう一度この世に来られる主イエスを待ち望むことですので、その備えということもできましょう。

先ほど読まれました旧約聖書は、マラキ書の最後の部分が選ばれておりました。マラキ書は旧約聖書の最後に収められていますので、旧約聖書の終わりのページということになります。

マラキ書は紀元前5世紀頃書かれた書物で、礼拝の中で犠牲が正しくささげられていないこと、異教徒と結婚することと結婚の契約を軽んじていること、そして全収入の10分の1は主なる神のものとしてささげる定めが守られていないことを批判した後、本日の主の日についての預言が語られています。最後に悪を行なうものに対する審判が行われ、神の名を恐れる畏れ敬う人には義の太陽がのぼること、さらに、主の日到来の先駆けとしてエリヤが遣わされることを預言しているのです。

ダビデ・ソロモンの時代に統一王国を築き、全盛時代を迎えていたイスラエルは、ソロモンの息子レハブアムが王となった時南北に分裂し、多くの人々が主なる神の前に悪を行ないました。その結果北の王国はアッシリア帝国に、南の王国は新バビロニア帝国に滅ぼされ、人々は捕虜として連れて行かれてしまいました。

そのような中、新バビロニア帝国はやがてペルシャ帝国に滅ぼされますが、ペルシャの王キュロスは捕虜として連れてこられた人々に帰還を許可します。人々は喜んで戻り、エルサレムの神殿および城壁再建にとりかかりました。

神殿は紀元前516～515年に完成しましたが、人々が期待した形で世界史の転換は起こりませんでした。待望のその時がなかなか訪れないために人々は、確固として希望を持ち続け熱心に礼拝と律法に固執する人と、信仰から逸脱の道を歩む人達に分れていきました。人々の間に大きな混乱が起きてきてしまったのです。

周辺に目をむけてみますと、南からはアラビア人を恐れて次第に後退してきたエドム人が、東にはアモリ人、西にはペリシテ人がおり、ユダヤ人たちを圧迫していました。帰還した民が住める場所は、実はその中のほんの小さな部分に過ぎなかったのです。マラキ書はこのような歴史背景の中で書かれ、神の愛を告げ知らせ、定められた主の日を待ち望むべきことを伝えたのでした。

続いて本日の福音書は、ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られているのを話しているのを聞かれた主イエスが、神殿の石が一つも残されないように破壊されることを伝えた場面でした。神殿の表玄関と回廊は、白大理石の円柱で、12mの高さを持ち、それぞれつぎめのない石でつくられていました。この輝くばかりの神殿をつくりあげている石が、一つも残らないように破壊されてしまうとは、誰も想像することが出来ませんでした。しかしルカがこの福音書を記す直前、これが現実のこととなってしまったのです。

70年、ローマ帝国はエルサレムを陥落させてしまいます。神殿も主イエスの言葉通り、一つの石も残らないくらい破壊されてしまいました。110万人の死者が出るほど、激しい攻撃だったと言われています。この状況を見て、ついに主の日が来たのだと、皆思ったことでしょう。ルカは、主イエスの言葉を伝えながら、これは主の日ではなく、私たちが待ち望んだ日の到来ではないことを伝えたのでした。地震や恐ろしい現象や著しい徴が天に現れるというのは、ユダヤの人々が主の日はこのように到来するのだと考えていた現象です。主イエスは神殿破壊の約40年前、誰も想像できないこの事実をすでにご存知でおられたのです。

さて本日は、この主の日から二つのことを学んでみたいと思います。

第一は、主イエスがすべてをご存知であることを改めて思い起こすことです。本日の福音書に書かれていましたように、主イエスは遙か先に起ることをすべてご存知でおられました。今回行ってきた旅も、自分自身を待っているのは十字架であることを主イエスはご存知でおられました。このような力は人間には与えられていません。しかし主イエスははっきりと知っておられたのです。

私たちは自分自身の有限さに、時として落胆し失望します。ああもっとすぐれた能力が備わっていたら、苦手なことがもっと少なければ、万能と言われる才能を持っていれば、そのような思いにしばしばとらわれるのではないかと思います。これは自分自身が傲慢に陥らないため、正しく生きる指針を主なる神に委ねるためです。自分自身の存在を見つめれば見つめるほど、私たちは人間に失望するのではなく、このような私たちを深く愛してくださる主なる神がおられること、主イエスに従って私たちが生きる大切さが教えられています。

第二は、主の日が訪れる時、私たちは自分自身の「実」によって審きを受けることです。

主の日と言うと、聖書に書かれているユダヤの人々が固く信じていた主の日の現象が頭に浮かび、とても恐ろしい、厳しい印象を持ちます。主なる神はすべての人を天国に迎えいられることを望んでおられると聞いても、自分自身はおそらく天国には迎えてもらえないのではないかと思います。思ってしまうのではないのでしょうか。

私たちは主の日を恐れるよりも、今自分が如何に正しく生きるか、主なる神の御心に従って歩んでいるか、それが大切であると伝えています。重要なのは、信仰の実によって審かれること、信仰の実すなわち、私たちの生涯すべてが主なる神の御心にならなっているか、主なる神に愛されている者として歩んでこられたかであると言っているのです。

私たちは、命は自分のものであると思っています。何よりも重要なものであると思っています。しかし自分のものでありながら、これほど自分の自由にならないものはありません。いくら望んだとしても、その命を延ばすことも縮めることも出来ないのです。自分の命がいつ終わるのか、知っている人は誰もいないのです。

これもまた、いたずらにその事実を恐れるのではなく、精一杯生きることを主は望まれているのです。私は自分なりに精一杯生きてきましたと、主なる神の前に立てるよう、生きていきたいものであります。